

# 私の一冊

歯科衛生学科 田中丸治宣 先生

清水義範著 『今どきの教育を考えるヒント』

小鹿図書館 : 370.4/Sh 49 (講談社)

15年ほど前に、暇つぶしに短編を集めた文庫本を買って読むという偶然から、清水義範という作家を知った。その文庫本の中の「永遠のジャック&ベティ」という短編を読んで思わず笑ってしまった。この短編は、中学校の英語の教科書を中学生が直訳して日本語にしたような文章でつづるといった、軽く笑いながら読める作品であり、このような笑わせ方もあるのかという興味を引かれた。彼の本の解説の多くには、パステージュ<注:パスティーシュ(Pastiche)>とは、作風の模倣のこと。パスティッシュ、パステージュとも言う。広い意味でのパロディ。故意に似せたものを「文体模写」と訳すこともある。出典:フリー百科事典『ウィキペディア』の名手とありました。それをきっかけに、折をみて清水義範の本を見つけては読むようになり、これまでかなり多くの作品を読んでいる。はじめは、パステージュの面白さを楽しんで読んでいたのだが、いくつかの作品を読んでいるうちに、世の中の事象、出来事等を一般の人と違った方向から見るとこんな風にも見えますよ、という感じで、小説でもエッセイでも、決して押し付けがましくない言い回しで、“物事の本質”を確かに伝えることに深く惹かれた。

今回私が紹介する本は、そんな作家が、「愛知教育大学を卒業しており、教育のことを気にかけてきて、私の教育観を一度は書かなきゃ行けないだろうな、」と思って書いた本であり、雑誌「現代」に連載した原稿をまとめたものとのことである。(あとがきより)

現在、教育をする立場にある私にとって、考えさせられることの多い本である。また、面白く読め「これはこの本を私がおすすめる大きなポイントです」、なるほどと納得させられることが多い本である。

この本の中で、私が興味深く感じたところは沢山あるが、3つに絞ってかいつまんで挙げてみます。

## ①『若者の問いに大人として答える』

「ひとに迷惑をかけなくても、覚醒剤と援助交際はダメなのだ」の章から

高校生が発した「人に迷惑をかけるわけじゃないのに、なぜ覚醒剤をやっちゃいけないんですか」の問いにテレビは答えようとし、実はどうも日本の大人はそういうときにきちんと答えようとし、彼はこれに答えている。「覚醒剤は健康に悪くて、体がボロボロになる」からではなく(これはタバコや酒との違いが説明できない)、「暴力団の資金源になって

いる」からでもなく(これは因果関係が逆転している)、「法に違反することだからである。」と明快に答えている。そこからさらに、「高校生の質問の本当の意味は、どうしてそれをいけないものと法で決めたんですか。人に迷惑をかけるわけじゃないのに、ということなのだ」として、「麻薬類は、その薬物的快樂の強さ故に、人間の日常性を破壊することが多い。… その結果、社会が崩壊するだろう。だから、これはやってはいけないと、みんなで法に決めたのである」と付け加えているところ。

## ②『教育の背負う宿命』

「大人と子供は憎みあう故に、教育は挫折し、人間は進歩する」の章から

かの有名なエジプトの古代王朝時代のパピルスに書いてある古代文字を解読してみたら、そこには「近頃の若者はなつとらん」と書いてあったという話を聞いて、そんな昔から人間って今と同じことを言っているんですねと笑うことは誰にもできるとした上で、同じ話を聞いても、受け止め方には、まったく違う二つの方向があると述べている。「そんな昔から、若者というのはいつもできそこないで、かくして世の中はどんどん悪くなっていく一方なのだなあ、という受け止め方がひとつ。もうひとつは、そんな昔から、年寄りというのは若者のやることが気に入らなくてしょうがないのだなあ」という受け止め方の二つであるとしているところ。

## ③『教育の現場の不文律』

「教師が生徒と恋愛したら、学校教育は成立しなくなってしまう」の章から

「恋愛というものは男女が同じ権利のもとですべきものであり、教育とは必ずしもそうではない。…先生は生徒と恋愛してはいけないんだ…それはあの職業におけるタブーなんだ」と述べている。その上で、「しかし、先生だって人間である。慕ってくれる生徒を好きになってしまうこともあるだろう。その時はどうすれば良いか。…世の中の多くの先生は生徒と恋愛してはならないという原則に対して、次のような例外規定を持っているらしい。一回だけは許す、と。独身の教師に限り、一回だけ、その生徒を受け持つことが終わってから、恋愛関係になり、結婚することを認める。どうもそういう不文律があるみたいだ」としているところ。

この本は、1999年10月に発刊されており、この本の中で、「荒れる少年たち」のことに触れており、3つの章にわたり解説してある。「キレる子どもたちの陰には、現代社会のイライラが潜んでいる」、「経済をすべてに優先させてしまった結果、日本人はどうもそういう、人間の普通の誇り、というものが社会を作ってしまったのである」、「王様のような所有欲を持った子供と大人のムカつきはつる一方」と指摘し、「そして、どうもしばらくはその社会構造のまま、行けるところまで行くしかないようなのである」と述べている。発刊からほぼ10年を経ているが、今回この原稿を書くにあたって読み返しながらか、最近のニュースを聞くにつれ、この著者が“物事の本質”をよく見極めていることに改めて感心させられた。

最後に、本著にある「教育者なら、押しつけではなく、話しあって納得させるべきだ」を肝に銘じておこうと思う。